

## 存在しない思考は 翻訳できない

三森ゆりか

著・日本経済新聞社・一六八ページ

「存在しない思考を翻訳することはできない」というこの佐藤氏の主張はまさに真理である。まだ商社に勤務していたころ、友人に頼まれて当時流行っていたドイツのロックグループの通訳をしたことがあった。この時私は驚くような経験をした。「存在しない思考」を訳すように依頼されたからである。後にも先にも私にとってこれほど衝撃的な経験も珍しく、このことが私を今の仕事に向かわせた一要因になったと言っても過言ではない。

ある音楽雑誌に掲載するために、某音楽評論家がネーナ（ロックグループ）にインタビューをすることになった。滑り出しは快調だったが、インタビューもなかばに

ザーをなぜ導入したのか、どの曲から使い始めたのか、シンセサイザーによって音楽が変化したか、今後も使い続けるつもりか、といった質問である。しばらく私とネーナのやりとりを聞いていた音楽評論家は、「まあ、そんなところでいいや」と切り上げた。

この評論家が漠然と思いついていた質問の内容とは、果たしてどんなものだったのだろうか。私にはいまだに謎のままだ。これが日本人同士のやりとりだったら、どのように展開したのだろうか。恐らくこんな調子だろう。「君たち最近シンセサイザーを始めたんだって？ それでどうなの？」「まっ、何というか、最高ですよ。乗りがいいって言うかぁ。とにかく今までと全然違う？」「全然違うんだ」「音が自由に作れるって言うかぁ、厚みが出る？」「いいねえ……こうしたインタビューの結果、どのような記事が書かれることになるのか、私には見当もつかない。

「それでどうなの？」という質問は、日本人同士ではごく普通に使われる表現である。互いに日本人であれば、質問者が具体的に何を聞きたいのかを考えていなくても、相手は適当にこたえてくれるであ

達したころ、評論家が突然こんな質問をした。「君たち、最近シンセサイザーを使い始めたそうだけど、それでどうなの？」何しろ私は、素人通訳だったので、この「それでどうなの？」を横文字にできない。何がどうなのか、自分でもよく理解できなかったからである。それでとりあえず、「あなたたちはどう考えてるの？ 今後もしンセサイザーを使っていくの？」という質問をした。ところが、ネーナから返ってきた答えに評論家は満足しない。「そういうことではなく、それでどうなのかを聞いて欲しい」とあくまで主張する。ネーナのほうに立った俄通訳の私はひどく困って、評論家にその通りを伝えた。するとこの評論家、しばし天を仰いで沈黙考。挙げ句、次のように言ったのだ。「僕にも分からないから、君、適当に聞いてよ」驚いたのはいきなり下駄を預けられた私だ。私は単なるアルバイト。ロックに詳しいわけでも、シンセサイザーの知識があるわけでもない。それなのに、いきなり評論家の見えない思考の自身を形にして質問をするように依頼されたのである。私は仕方なくいくつか具体的な質問をした。例えば、シンセサイ

らう。相手が自由に自分の考えを述べたら、質問者は相手の答えに合わせて話を進めてゆく。それが日本的なコミュニケーションのひとつの典型である。他があって、自がない。自がなくても他との関係が成立する。ところがこの間にひとたび「外国語」が介入すると、事情は一変する。佐藤氏の言うように、ない思考は翻訳できず、通訳に頼むことすらできない。通訳の仕事は、具体的な思考内容があつてはじめて有用になるのだから、それがないければ必要ないのである。

書店に行くとき山のように英語の本があふれ、町には英会話学校がはん濫している。そんなに必死に勉強しても日本人がなかなか英語に熟達しないのはどういうわけか。英語と日本語の言語的な隔たりが大きいからだろうか。もちろんそれもあるが、私はそれだけでは考えていない。最も問題なのは、母語教育の中で思考の自身を抽出し、それを表現するためのトレーニングがなされていないことが原因である。何が知りたいのか、なぜ知りたいのか、と自分の思考の自身を探求していく技術が欠如していると、いざというとき自らの考えすら把握できず、立ち往生することになるのである。

その  
おまけのコラム

(つくば言語技術教育研究所)